

[トークセッション]

「 どうなの？ 福岡の文化芸術活動は 」

アートサポートふくおか 代表 古賀 弥生
(株) ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室
準主任研究員 大澤 寅雄

古賀 ; 本日のフォーラムは、テーマが「アートマネジメント研修会」となっていますが、このようなフォーラムは5年ほど前から継続して開催されてきました。私は、毎回顔を出させていただいていますので、ご来場の多くの方ともどこかでお会いしたことがあると思います。

大澤さんを福岡の皆さんにご紹介したいと思います。

本日のプログラムにプロフィールがございますが、現在の肩書きは株式会社ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室・準主任研究員です。ニッセイ基礎研究所といえば業界の中では有名です。文化政策系の調査に関しては大変多くの実績がある研究所ですし、大澤さんご自身もそういった全国レベルあるいは地方レベルの多くの調査に関わってこられ、豊富な情報とデータをお持ちの研究員です。最近お住まいを関東の方から福岡県内に移されました。「何でまた福岡なの」かを最初に伺っておきましょう。

大澤 ; 一つは震災がきっかけにはなっていますが、私自身東京から日本を見るということに慣れすぎているのではないかという気がして、一度眼差しを変えたいというか、いわゆる東京に対して地方という言い方にどうしてもなるのですが、東京以外のところから日本を眺めることにより、また別の日本が見えるのではないかといいことです。しかしそれは建前で、本当はご飯もお酒も美味しそうだ、というところで選びました。

古賀 ; 福岡を選んだのは、その食べ物が決めてですか。

大澤 ; 食べ物はやはりでかいです。

古賀 ; それは嬉しいことです。いい理由だと思いますが、福岡県内いろいろ多彩なところがあって各地ご飯が美味しい中で、糸島を選ばれたことは何かあるのですか。

大澤 ; 糸島には美味しい野菜、魚、お肉全部ありますし人が面白いです。糸島では面白い人たちとたくさん出会いました。

古賀 ; ということで今年に入ってから、こちらに拠点を移されました。お仕事の方は今もニッセイ基礎研究所の所属でいらっしゃるんですね。

大澤 ; いやいや、寛大な会社というか寛大な上司で、私が福岡で生活をしたいと相談したところ、「じゃあ雇用契約ではなく労務委託契約にしよう」ということで契約させていただき、今私は、在宅勤務です。会社の保険には入っていませんが、一応「肩書きを使っているよ」という契約を交わっています。これが私のメインの仕事ですから、この肩書きで仕事をさせてもらっています。

古賀； ニッセイ基礎研究所さんは全国を視野に入れたお仕事が多いと思いますが、拠点を福岡の方に移されて視点が変わられたところもあると思います。大澤さんの視点から福岡の文化芸術活動について、どんな風にお考えかを伺うのがこの午前中の二つ目のプログラム、愉快的トークセッションとなっています。その愉快的な話を与太話にしないために大澤さんにいろいろな情報、レジュメをご用意いただいていますのでそちらのお話から入りましょう。

大澤； そうですね。全国的なところで、近年の文化芸術と文化ボランティアを巡る動きを最初にご紹介したいと思います。近年といってもここ数十年なのですが、今日のテーマになっている文化芸術とか文化ボランティアは2001年あたりから振り返ると、ボランティア国際年が2001年です。これは私も実はあまり詳しくありませんが、古賀さん、ボランティア国際年ご存知でしたか。

古賀； いやー、何かあったなというぐらいで詳しくはありません。

大澤； これは国連総会において、日本からの提案で決まっただけなのですが、それ以前に阪神淡路大震災があって、そこでボランティア活動がものすごく盛り上がったという背景があって、日本の提案でボランティア国際年を設けたのではないかと思います。先ほど中村さんの話にありましたように、文化芸術振興基本法というのが2001年春にありました。その文化芸術の振興とボランティアとはそういう意味で誕生の背景、時代性は同時代だったという気がします。

続いて2002年に、河合隼雄文化庁長官、もうお亡くなりになりましたが、文化ボランティアの推進ということを強く謳われました。文化ボランティアという言葉は多分この2002年ぐらいから言われ始めているような気がします。

先ほど文化芸術振興法と第三次基本方針の説明がありましたが、第一次方針は2002年にありました。その時、既に文化ボランティアという言葉は方針の中で謳われていたのです。敢えてここに書いたのは、2005年「福岡県西方沖地震被災者へ、アートによるサポートプロジェクト」古賀さんご存知ですね。

古賀； こんなに大きく書いて頂くほどのものではなかったのですが。

大澤； これを是非紹介したかったのは、これを文化ボランティアと言っていていかどうかもちょっと迷ったのですが、とにかく私驚きました。学校にいて子供達の学習発表会をアーティストがお手伝いするという活動に、ものすごく感銘をうけて、その話を古賀さんにインタビューした覚えがあります。その後の東日本大震災でもかなりの数のボランティアによる文化関係・芸術関係の活動がありましたが、既に福岡ではその6年前にこのような動きがあったことを是非お伝えしたかったわけですね。

そのあと少し離れますけど、2010年民主党政権の中で新しい公共という言葉ができましたね。これもボランティアや市民活動にまた少し光があたった時期だったと思います。ご承知の通り2011年東日本大震災がありましたが、この時もボランティアの大活躍でした。それ以前の阪神淡路大震災や福岡西方沖地震の時はそれほど目立たなかった気がしますが、アート関係のボランティア活動が大きく取り上げられたことにより、こんなにたくさんの活動が起きたのかと思いました。

その背景の一つはソーシャルネットワークの発展というか、ツイッターやフェイスブックで呼びかけて、それに答えるという形で、それとボランティアとは無関係じゃないという気がします。

最近、古賀さんはボランティアの活動を見ていて、ここ10年位で変わったと思うことありますか？

古賀；文化ボランティアは数的には増えているのではないかと思いますし、美術館やホールのボランティアは人気ですね。特に美術館ボランティアの話ですが、NPOとかボランティアのサポートセンターから私のところに電話がかかってきて、「ボランティア活動をやりたいという方が来ていますが、募集の情報を知りませんか」というお問い合わせがありました。全分野で、と言えることではないのかもしれませんが、結構人気があるなという実感です。

大澤；それもこの10年の一つの変化かもしれませんね。そこでもう一つ統計資料を紹介したいのは、文化芸術に関するデータです（別添「大澤寅雄氏 参考資料」：内閣府2009 参照）。これは先ほど紹介あったデータですがこの1年間に文化芸術を直接鑑賞した経験がありますか、という質問内容ですが観賞したことがあるという人が62.8%ですから、3人に2人の日本の国民は1年間に1回とっていいと思いますが、何かの美術品、音楽、お芝居などを見たことがあるという数字です。

それと同じ調査で観賞を除く文化芸術活動の経験は（別添：内閣府2009 参照）、つまり観賞には行くが、例えばお祭りに参加したとか創作活動とか支援活動、ここはボランティア活動と言い換えてもいいと思いますが、いろいろなことをやったかという、それはやったことはないという人が76%、4人に3人はやったことがない、見に行ったことはあるが自分から積極的に何か作る立場や参加する立場、支援する立場で関わることは、まだまだ稀だということが読み取れると思います。実際のこの数字をみると、なんとなくそうだろうなという印象を持ちます。

別の統計データ社会生活基本調査に（別添：総務省2011 参照）、趣味娯楽の種類別行動者率というものがあります。これはいろいろな種類が並んでいる中で、比較的文化に近いところをピックアップしたものです。

全国的な調査で全国のデータと福岡県のデータが取れます。グラフが2本あるうちの濃い方が全国、薄い方が福岡です。例えば美術鑑賞、「美術鑑賞したことがありますよ」という人の行動者率は16.5%（1年間に1回以上）ですが、福岡県は15.6%、全国に比べると微妙に少ないのです。

他の項目、例えば演劇鑑賞・舞踊観賞や楽器の演奏とか音楽鑑賞、あと美術の製作とかコーラス合唱とか陶芸とか、どの項目を拾っても若干福岡県は全国より少し低いことが統計からみえます。これは省きましたが、圧倒的に多いのはやはり東京であることは間違いないのですが、大阪や名古屋そういう大都市は全国よりも上回っているデータが多いのですが、福岡は九州を代表する大都市圏、福岡市を有しながら、若干低いこの数字を見たときに、ああそうなのかと思ったところです。

この表をご覧になって意外だなと思われた方がいらっしゃいますか？うなづく方もいらっしゃいますね。

あと県民意識調査を（別添：福岡県2013 参照）見てみると、福岡県民が行政のどの分野に力を入れて欲しいかという中で、文化やスポーツのところから、主に文化と生涯学習のところだけを拾いました。文化芸術を鑑賞し経験する機会の充実では38.6%、4割位いらっしゃるので、サークル活動の支援や環境づくり、交流は2割を切っています。一般の人はまず文化というと、見に行く聴きに行くことで、チケットが高いからそこはやはり低く抑えるために「行政頑張るよ」と思っている方が多いのかなという気がします。

少し古いデータで10年前の2003年ですが、文化芸術に関する意識ということを県民に聞いているもので、文化芸術環境の充実度（別添：福岡県2003 参照）について、「充実している・どち

らかといえば充実している」「まあまあ充実している」にあげる人は4割ぐらい、「充実していない」「どちらかといえば充実していない」という人は48%で5割ぐらいです。そうか、県民は文化芸術の環境が充実しているかどうかというと、福岡県はまだ充実していない、と思っている人が若干多いという感じがしました。これは2003年の数字ですからその後10年ぐらい経っているので環境も変わっている可能性はあります。

それから文化ボランティアの状況ですが、文化だけ取り扱うデータは少ないのですが、国民生活選好度調査（別添：内閣府2011 参照）を内閣府がやっています。これは私も初めて見ましたがボランティア活動に参加したり、そのボランティア活動のサービスを利用したり、ボランティア活動に対して寄付をする実績があるかどうかということ国民に聞いています。参加しているが24.6%、まあ4人に1人ぐらいで、ボランティアさんがやっている活動のサービスを利用している方は14.4%でした。ボランティア活動に対してお金をだして応援している方は37.2%と意外にも寄付の形で貢献している人が多いという数字がでてきます。このことは少し意外に思いました。もちろんここでいうボランティア活動とは文化ボランティアだけでなく、この調査のタイミングがもしかしたら東日本大震災のあとかも知れません。そういう意味では防災とか災害とか福祉とか、そういうことに対しての寄付ということも含めると頷けるかもしれません。

文化という領域からすると寄付はまだまだそこまでの意識はどうかと思ったりします。

同じ調査で活動分野ごとに参加経験者の割合について見ると（別添：内閣府2011 参照）、文化というのが学術・スポーツ含めて文化芸術振興というデータになっていますが6.3%、まちづくりや、防犯防災に次いで3番目でした。案外文化芸術を含めたこういう領域でのボランティアというのは、例えば子育てとか介護福祉よりも参加率は高いということも少し意外に思ったところです。皆さんどんな風にお感じですか。このようにデータによって、調査対象が違うとかなり数値が動くこともありますが、私は意外に文化ボランティアってメジャーになってきているのだなという印象をもっています。

文化庁が河合隼雄長官時代に行った文化ボランティア活動に関するアンケート調査（別添：文化庁2003 参照）があります。

文化ボランティア、これは劇場とか美術館博物館でボランティアをやっている方に聞いているのですが、どのような活動をやっているかという、チケットのもぎり・会場の整理・誘導補助が半分ぐらいです。展示系の解説や説明の活動は27%、あと窓口業務の補助等ありますがこれは省きましょう。「今どんな活動をやっていますか」「できればどんなことやってみたいですか」という質問を同じ選択肢でやってみると、例えば講演の企画立案等をやりたいという割合が高かったりして、もぎりや会場整理の活動をやりたいという希望はあまりありませんでした。

もう一つ文化ボランティア団体の悩みや課題について（別添：福岡県2012 参照）、これは昨年度のこのセミナーで紹介されたアンケートですが、もう一回振り返ってみてもいいなと思ってあえてもってきました。みなさん文化ボランティア団体の悩みや課題は、世代交代がうまくいかない、財源の確保が難しい、知識・習得・質の向上を図りたいが研修が十分じゃない、いろいろあがっています。ただこのように主催者や施設が考える悩みや課題と、ボランティア団体・ボランティアを実践する当事者の間では結構開きがあるのが面白いと思いました。だから主催者やホール・劇場側がボランティアとお付き合いしていて、ホール側から見ると世代交代、なんとかもう少し若い人に入って欲しいなあとと思っているのかなと思います。ボランティア団体側はお金をどうにかしてくださいと思うように、すれ違いが若干みえると思いました。

ここで是非古賀さんに去年を振り返ってもらって、どんな話がでたか、何か記憶があればお願いします。

古賀 ; 去年のフォーラムで議論だったか否か、定かではありませんが確かに世代交代・高齢化という話は大きな問題として話題になりました。その時にいろいろコメンテーターの方のお話にてたのは、必ずしも高齢化していることが悪いこととは言えないのではないかという話も出ていたようです。

大澤 ; なるほど。

古賀 ; 例えばある程度高齢で同じような世代の方達が集まって何か始めようと活動しているグループがあったとして、そこに若い人が入ってこないからといってそんなに嘆くことではない気がします。例えば読み聞かせ活動をしている 60 代の主婦の方の集まりがあったとして、そこに 30 代の方が入れるかというとやっぱりちょっと違います。大事なことは、子供達に読み聞かせの機会を提供することだと考えたら、その団体に若い人が入ってくるというよりいろんな読み聞かせ団体が地域が増えていくこと、その 60 代の方達のノウハウを 30 代の方達の集まりに伝えていくというやり方だっているんじゃないの、という話をしたような記憶があります。

大澤 ; ああ、なるほどなあ。

古賀 ; 例えば先ほど、大澤さんがおっしゃった主催者側・施設側とボランティア団体側の食い違いは印象的です。その一つの表れが、このグラフの項目の下から 2 番目、コミュニケーション不足ということがあります、これは福岡独自の問題ではないと思いますがコミュニケーション不足をあげている割合に少し開きがありますね。だからお願いしている側と実際にやっている側とギャップがある場合もあるのではないかということが少し見えてきたという気はします。

大澤 ; ありがとうございます。私もそのコミュニケーション不足問題は主催者にしてもボランティアにしても選んでいる人が一番少ないことは、コミュニケーション不足に対する自覚があまり無いのかなという気がします。実際このように課題がこれだけ食い違っているのに、コミュニケーション不足のところに関してはそう思っていないということは、コミュニケーション不足だという自覚のないままそれぞれが完結しているところに原因があるのではないかという気がします。

いろいろざっとみてきましたが、全国からみた福岡の文化芸術活動・文化ボランティア活動について、近年の動きや統計資料から、全国はこうだけど福岡はこうだよという近年の動きや統計資料持っていません。でも全国的にボランティアに対する関心は 2000 年以降相当高まりましたが、やはり災害が起きたときの後はすごく注目されて、ボランティアの役割や期待がすごく注目されるのですがそうでなくなるとなんとなくまた落ち着いてしまうところがあるのかと思います。福岡で言うところのどのような感じなのか、古賀さんに聞いてみましょう。

古賀 ; 私がボランティア全体の動向を把握しているわけではありませんが、多分これは同じだろうという気はします。何かあると集まる。それは大きな文化イベントなどがあった時には福岡県民の方、気のいい方が多いので協力してくださる方が結構いらっしゃいますが、そのあと継続ということになると、どんな組織で続けていったらいいのか、誰が核になるのか、そのお世話係など、「私、ちょっとそこまでは難しいは」と、後が続かないという傾向があると思います。

大澤 ; 会場内の中にも静かに頷いている方がいらっしゃいますが、これは福岡だけの問題ではないかも知れませんね。あと統計資料で見たときに、福岡を福岡県としてみるか、福岡市というところでみるかにもよりますが、都道府県でみたとき先ほどの活動は全国平均より少し低いところが気になるところです。

古賀 ; それはどういうことかという、先ほど大澤さんがおっしゃったように、基本的に大都市圏は全国平均より少し高くなる傾向があるものだと思うので、福岡県だけが何故という気がします。県内も非常に多様なので都市部とそうでないところの差があるのは確かだろうと思います。機会の差がでてしまうのではないかと思いますね。

私はNPOの活動として、特にこの10年ぐらい子供の芸術体験ということで、小学校に携わり学ばせていただく機会が多かったのですが、都市部ではないところでよく先生方から言われたのが、「ここは田舎だから子供達が文化にふれる機会がほとんど無くて、劇団四季を見たことある子がいるかないかというところ。」というように劇団四季が基準なのです。劇団四季を見たことあるのは転入生が一人いるぐらいとか、そういう言い方で測られていることを聞いたことがあります。それと比べればやっぱり北九州市とか福岡市という大都市に住んでいる方達・子供達とは違うでしょうね。それが大きいと思います。

大澤 ; まあ福岡県として一言で語ることは難しい面もありますね。その福岡県自体が、例えば九州というエリアからみるとやっぱり本州に近いという意味でも、もう少し高くてもいいのではないかと印象を持ちます。

古賀 ; 東京・大阪等の公演が地方を回る時の受け皿になれるホールがあるのも福岡県の方が他県に比べ充実している面はあると思います。私は長崎県で仕事する機会が最近多いのですが、長崎だったらどうかという、恐らくこれは数字も裏付けも何もなく申し上げますが、福岡県よりも低いとはっきり感じます。

大澤 ; 先ほど劇場法の話をお聴きしていたときに、劇場法があることで、できるだけ東京一極集中から格差を無くそうという思いがあって、法律が整備されたのではという話がありましたがそれ大賛成です。本当に格差は広がりきるところまで広がってしまったのではないかと思います。

今こういう現状の中でもっと福岡がこれから劇場・音楽堂を中心にしてこういう活動の中で、文化を鑑賞する側も実践する側も積極的に取り組む人を増やすには、やはりボランティアは絶対大事だとさっき改めて思いました。というのは劇場法の話をお聴きしても、どこにボランティアとの接点があるのか、もしかしたらびんとこない人が多いかもしれないなあと思いました。

例えば専門的人材、あれだけ劇場法の中で言われている割にはボランティアという言葉は多分できていません。でも私は敢えてそれは絶対大事です、といたいのは、劇場・ホール・音楽堂は、実際その現場にいったらみるとスタッフはそこだけしか知らないのです。その建物の中から出ることがほとんどないと断言しては怒られるかもしれませんが、舞台があって客席があって、ロビーがあって事務所があって他にもいろいろあります。そこではもう皆さん必死で這いずり回って動いていると思いますが、じゃあそこからまちに出ることがあるかという実はあまりないと思います。

それに比べるとボランティアはそこを出入りする重要な人材だと思います。つまりこれは専門的な人材ではないかもしれないが、PRという言葉が皆さんよく使われると思いますが、あれはパブリック・リレーションなのです。パブリックと繋がる、人々と繋がる、その役割はボランティアの

人が一番近い、つまりそこにボランティアが出入りするということは、その地域と劇場を行き来する、その行き来の仕方はいかなる自分がボランティアに関わっている公演の時に事前準備とか打ち合わせのために行って、本番も行って、後で打ち上げも行ってと、そういうために行き来します。またその人は家があって家族がいて、あと会社に行って職場の仲間がいて、地域の多くの人との交わりもあります。

劇場・音楽堂・ホールに情報を運べるのはボランティアが一番だと私は思います。だから劇場法の話とボランティアというのは接点が薄いように見えるのですが、私はそのボランティアを活かすということが先程の話を聴いて劇場法にとって非常に大事だと思いました。

古賀 ; そうですね、10年前のデータにでていたと思いますが、文化庁の文化ボランティアに関するアンケート調査で、実際にやっている仕事はきっぷのもぎりや会場整理などまあ比較的当日行ってイベントのお手伝いをするような感じの内容が多いのですが、今後やってみたい仕事は何かというと、先ほど企画をやってみたいというデータがあるというご紹介がありましたね。特に年代別に分けると、60歳以上よりも30代40代の比較的若い世代の方にそういう意欲的な人が多いというデータがでていたと思います。

それはすごく心強いことなので、この辺の層の人たちと一緒にどれだけやっていけるかということが劇場の運営にすごく大きいと思います。ただ、これはたぶん地域差があると思うので私の感覚で申し上げますが、「うちは違うよ」というところも当然おありだと思うのですが。今、文化施設でボランティアをやっている方達はやはり依頼を受けて、お願いされて「いいよ」という気のいい方が多く、そこから先じゃあ企画をやってみようとか、もっともっと自分達で施設を拠点にしてまちづくりと文化を繋ぐようなことをやろうというような意欲や行動力がある方達が多くいるか、というところはまだかなと思います。そういう方達の裾野をどう広げていくか、活動者を増やしながらか、そんなこともやってくださる方を引っ張りあげていくとか、背中を押すようなことをどれだけやっていけるかは課題の一つだと思います。

大澤 ; まったくですね。さっきのパブリック・リレーションズということは、今劇場法の話がでていながら、専門的な人材というイメージをもたれていないか、まだそこまではいっていないと思いますが、私が1年間にアメリカに行っていた時に、やはりPRマネージャーという人がいました。

古賀 ; それは劇場にですか。

大澤 ; 劇場にです。そのマネージャーは、例えば劇場から外にでて子供達にワークショップもやるし、ボランティアの調整もします。最初PRマネージャーと紹介され、ああPRやるのだからチラシを作りメディアなどに発送する広報担当というイメージでしたが、そういうことはマーケティングディレクターがしていました。

「PRマネージャーは何をやっているの」と聞くと、「いや文字通りだよ、パブリック・リレーションだよ」というのです。なるほどなあと思いました。それが今の劇場やホールを取り巻く日本の環境を考えると、指定管理者制度にももちろん問題もあればいいところもあると思いますが、指定管理者は建物の管理をいかによくするかだと思うのです。だからそこにいる人は建物の外に出ることは仕事を放棄することになるので出られないという気が私はします。そこでボランティアの人達は是非アシストとして、外と繋ぐ役目を果たして欲しいと考えたのです。

古賀 ; そうですね、そういう意味では本当にボランティアさんは専門的人材ですね。パブリック・リレーション マネージャーという、アートマネジメントの専門的な勉強を大学かどこかで勉強してきた人というイメージを持たれるかもしれない言葉ですが、ボランティアさんはある意味やっぱり専門家であって本当に地域と劇場を繋いでくれる専門人材と言えらると思いますね。

大澤 ; 恐らくもぎりにしたって会場整理にしたってその専門を極めるということがあると思うのです。いかに気持ちよくお客さんを案内する専門性を磨くとか、それはもう専門家とっていいと思いますし、そういう誇りとかプライドは大事だという気がします。

少し話が横道にそれましたが、全国と比べた福岡、他地域との比較を喋ってみたいと思いました。私はまだ福岡にきて半年余りなので、誤解していると思われるかも知れませんが古賀さんに聞きます。九州という一つのくくりで同朋意識みたいなものがあるのではないかと思うのです。これは四国では、そうはいかないのではないかという印象ですが、いかがですか。

古賀 ; あ、そうですか。

大澤 ; 四国、同朋意識あるかな。近畿にしても。私は滋賀県生まれで近畿と言われるとなんとか気恥ずかしいし、仲間に入れてもらってもいいのですか、滋賀県。という遠慮があったり、京都から滋賀県みたら、「お前は近畿じゃねえよ」って言われそうだなあとか。でも九州はみんな語尾に「タイ」ってつきますね。

古賀 ; いやいやいや (笑)

大澤 ; そんな感じもあります (笑)。それと九州、あるいは福岡県もそうなのかも知れませんが物事を共有する精神も旺盛なのですね。県内のいろいろな人が集まって情報を交換する本日のような場があり、ここで名刺交換もする、このような機会をずっと続けてこられたのだろうし、他地域にも私いくつか呼ばれ参加する機会は結構多いですよ。福岡しか分からないのですが、福岡県内であるいは北部九州、九州全体で集まって考えてみよう、ネットワーク作ってみたい、そういう話を私ここに来てからもう4回位聞きました。

古賀 ; 裏返せばまだ繋がっていないという意識があるのではないかという気がします。そこが課題だと思っているから、今一所懸命繋がらねばという努力をしているのだと思います。

大澤 ; なるほど、そういう見方もできますね。でも繋がる時に地域によっては県民性とかライバル意識が度々起こることもあるでしょうね。東北でもそうだろうけど、四国だとその時の話で、藩にまで遡るわけです。俺たちは何々藩とは付き合わないみたいな。そのような話が九州でもあるにしてもまたライバル意識があってもそれはいい感じのライバルだという気がします。古賀さん・・・。

古賀 ; いやあ。これも私が会場の皆さんに賛同してもらえようといえるか否か分かりませんが、九州は一体感という思いはあると思います。九州全体の中でみると、例えば宮崎・鹿児島は南九州組と北部九州は基本的に少し文化圏が違うからネットワークは別のものがありますね。熊本は福岡をライバル視しているかも知れませんが、でも福岡はライバルとってない (一同笑)。

あと長崎・大分あたりの方達は、会議等のとき福岡県さんがそうおっしゃるならみたいなそんな感じはあります。でもそれぞれ独自の県民性があるから、文化の面でみてもそれぞれ独自性があるって面白いのですが、九州の人が集まって何かしましょうという時は、福岡をリーダーとしてみる雰囲気はあるような気はします。

大澤 ; ああなるほど。それは確かに近畿とか関西圏にはありません。京都・大阪・神戸あたりはもうそれぞれがリーダーだと思っている節があります。脇っちょの、滋賀県などもうほんとうにシヤイですから、京都さんがそうおっしゃるなら、って感じですよ (一同笑)。

なるほどなるほど。文化ボランティアとか文化芸術と直接関係はないかもしれないけれどそういうメンタリティはどこかある気がします。

古賀 ; 九州は福岡以外にお住まいになったことは無いとしても、どこかに行かれましたか。

大澤 ; 去年熊本には行きました。

古賀 ; どんな印象でしたか。

大澤 ; うーん、どういう印象か？福岡に比べて古いルーツに誇りをもっている、あとすごく素朴さを感じました。まあ九州全体、人がいいなと思いますね。

古賀 ; 実際、福岡をどのようにみていらっしゃいますか。

大澤 ; 私は福岡のこれからの潜在能力 (ポテンシャル) にすごく期待しています。だから福岡に来たという理由でもあります。単に東京に対して地方という図式ではなくて、まあよく言われることで地勢的にも一番アジアに近いところです。実際に来てみると、知っている人が「ちょっと韓国行ってきた」「ちょっと釜山へ行ってきた」というような話を普通に聞くとき、いや東京からではなかなか行けないと思いました。あとサイズの良さを、この間少しお話したことがあるのですが、確かにサイズがいいなという気がするのです。

古賀 ; サイズとは人口的のことですか？

大澤 ; 人口的なことが大きいかもしれませんね。都市の広さと人の密度とっていいのかな。あと抽象的でぼんやりしますが、関係のサイズです。皆さん等身大で付き合える感じがしています。すごく上下関係が少ない気がするのです。私の周り、私が来てからお付き合いさせていただく印象として、フラットで楽だなあ、気が楽だなあ、そんな気がしています。

古賀 ; あの、外からおいでになったという状況で仲間に入れてもらう側ですね。入りやすい雰囲気でしたか。

大澤 ; すごく入りやすく、ありがたいなあと思いますね。自分の住んでいるところは糸島の小さなコミュニティですが、私には畑もあるしその裏山には、祠 (ほこら) もあるそんなところを借りています。そこの自治会さんから、しょっちゅう声をかけてもらえてありがたいです。引っ越して

きてわけもわからずに地域の行事等に誘ってもらふ事などなかなかないのではと思います。

古賀 ; 福岡の文化の状況についてはどのようにお考えになりますか。

大澤 ; これがねえ。私はそういうことを専門に研究しているからでしょうが、難しいです。というのが、一つは先ほどの数字も意外でした。もっと福岡県の活動への参加率は高いと思っていたのですが意外と低かったのですね。一方では九州全体をみても元気がいい人達が大勢いるのですが、一方で「あれっ、こんなところの元気がなくなっている」ということを聞くことがありますね。

例えば劇団四季が撤退しましたね。チケットの売れ行きが悪かったのか予定されていたクラシックの公演がキャンセルになったというような話を聞くと、そっちの方面はそうなのかとも思うのですが、一方では元気な人もたくさん出会いますし、プロジェクトもたくさんありますから、まだ一言で福岡がどうか言うまでは掴みきれていません。

古賀 ; 県というレベルになると多様すぎて纏められないところはありますね。先ほど少し出した話で、県内の芸術体験の機会の差もありますし、一様になかなか語れないところがあります。

今日のお話、大澤さんが全国から見た福岡の状況に切り込んで質問する私の方が、「福岡はこうなのですよ」というふうに申し上げられるなにか一つの塊、福岡像みたいなものが正直、形成できていないのでどうしたものかと迷いながらここまでできてしまいました。

大澤 ; その一つの答えを導き出すのは、今でなくてもいいと思います。一つは多様であることとか、あるいは実態とイメージが現実の数字やデータとはズレみたいなものがあることを共有できたと思うし、午後からの事例発表は多分これまた一言でこれを福岡の事例とっていいのかわからないくらい多様な3つの事例だと思うので、それを踏まえたフリーディスカッションで、福岡は面白いなあと思えるような日になると考えています。

古賀 ; 中村さんの劇場法の話福岡県内の状況と照らし合わせながら私は聴いていましたが、やはり今、活発に活動している劇場・ホールがあるところと、いわゆる昔ながらの文化会館しかないところの差があるのかなあという気がします。専門的人材の連携で、専門的人材を擁しているところとそうではないところが連携していくとか、大学との連携というお話がありましたが、では実際どこどこが繋がったら上手くいくのか、私の頭の中では描けないなあという思いが一つありました。

これは私が福岡県内のいくつかの自治体で、プラン作成のお手伝いをさせていただく中で感じていることですが、もろもろの問題が地域ごとにあり、一様にみなさん評価についてどうしたらいいのか悩んでいます。この評価についてはどうなのでしょう。

大澤 ; 今評価のことで悩んでいる自治体や劇場・音楽堂は相当多いと思いますが、後ろ向きになってしまうと評価するということは、もう厄介なこと以外、何ものでもないと思います。場合によって例えば経費を削減するために評価をするところがあるとしたら、それでは最初からやらない方がましだと言いたいのです。

私たちはこういうことを目指しているから前向きに一步步足取りを確認していこうとか、そのために他の人に説明して、味方をたくさん集めるために確認したり、説明したり、素材集めようとか、そういう意味での評価をこれからしていただきたいと思います。私もそういうお仕事の手伝い

をさせてもらうのですが、あまり評価自体に振り回されなくて欲しい気はします。

古賀 ; アメリカの劇場等で評価とはどんな感じですか。

大澤 ; 私が感じたことは、どちらかというと説明責任ということになると思います。評価することよりも、説明すること。責任があるから説明するというよりも味方をつけたいのですね。

例えばアメリカの場合、わりと寄付や協賛が大きな財源で、政府や自治体からの財源は少ないのですが、それでもそういう人たちに対していかに私たちは地域に貢献しているかということから語っていくためにいろんなデータを収集しています。日本でやっている評価と近いのですが、多分方向が少し違う気がします。

古賀 ; 支持をしてもらうために、当然私たちはこういうことが出来ていますということを訴えねばならないわけで、そういう意味で評価が行われているということですね。

大澤 ; そうですね。

司会 ; 非常に楽しいトークを、有難うございました。もっと聴きたいところですが、ここで午前中のプログラムを終わらせていただきたいと思います。大澤さん、古賀さん有難うございました。